第十二講『今鏡』

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

*大内記(だいないき)の聖(ひじり)は、やむごとなき博士にて、①文作る道、類(たぐい)少なくて、世につかへけれど、心はひとへに仏の道に深くそみて、あはれびの心のみありければ、大内記にて、記すべきことありて、催(もよお)されて内に②参りけるに、左衛門の陣などの方にや、女の泣き立てるがありけるを、「何事のあれば、かくは泣くぞ」と問ひければ、「あるじの使ひにて、石の帯(おび)を人に借りて、もてまかりつるが、道に落して③はべれば、あるじにも重く、戒(いまし)められむずらむ。さばかりのものを失ひつる、あさましく悲しくて、帰るそらもなければ、④思ひやる方もなくて、それを泣きはべるなり」と申しければ、「心のうち推し量るに、まことにさぞ悲しからむ」とて、わがさしたる帯をときて、取らせたりければ、「元の帯にはあらねども、むなしく失ひて申す方なからむよりも、⑤おのづから罪もよろしくやはべる」とて、「これを持てまからむずる嬉しさ」と、手をすりて、とりてまかりにけり。さて、片隅に帯もなくて隠れゐたりけるほどに、事始まりければ、「遅し、遅し」と催されて、⑥御倉(みくら)の小舎人(こどねり)とかが帯を借りてぞ、公事(くじ)はつとめられはべりける。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

＊『池亭記（ちてい き）』とて書かれたる文にも、「身は朝（ちょう）に在りて、心は隠（いん）に在り」とぞはべるなる。＊中務宮（なかつかさのみや）の、もの習ひたまひけるにも、文少し⑦教へたてまつりては、目を閉ぢて仏を念じ⑧たてまつりてぞ、怠らず⑨つとめたまひける。かくて年をわたりけるほどに、年たけてぞ、頭剃（かしらおろ）して、＊横川（よかわ）に登りて、法文（ほうもん）習ひたまひけるに、＊増賀聖（ぞうがひじり）のまだ横川に住みたまひけるほどにて、「＊止観（しかん）の明静（めいせい）なること、前代にいまだ聞かず」と読みたまひける、この入道ただ泣きに泣きければ、聖、「⑩かくやはいつしか泣くべき」とて、⑪こぶしを握りて打ちたまひければ、我も人も事にがりて立ちにけり。また程経て、「⑫さてもやははべるべき。かの文受けたてまつりはべらむ」と⑬申しければ、また前のごとくに泣きければ、また⑭はしたなくさいなみければ、後のことばもえ聞かで過ぐるほどに、また懲（こ）りずまに、⑮御気色とりたまひければ、またさらに⑯読みたまふにも、同じやうにいと泣きをりければこそ、聖も涙こぼして、「⑰まことに深き御法（みのり）の尊くおぼゆるにこそ」とて、あはれがりて、その文静かに授けたまひけり。

さてやむごとなくはべりければ、＊御堂（みどう）の入道殿も、＊御戒（かい）など⑱受けさせたまひて、聖みまかりにける時は、＊御諷誦（ふうじゅ）などせさせたまひて、さらし布百匹（ぬのももむら）賜ひける。＊請文（うけぶみ）には、三河（みかわ）の聖たてまつりて、秀句など書き留めたまふなり。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

昔隋の煬帝(ようだい)の智者に報ぜし、千僧一つをあまし、今左丞相(さしょうじょう)の＊寂公(じゃくこう)とぶらふ、さらし布百千(ももち)に満てり

とぞ書かれはべりける。

（『今鏡』による）

＊大内記の聖＝平安中期の漢学者、慶滋保胤(よししげのやすたね)のこと。
＊『池亭記』＝慶滋保胤の作品。
＊中務宮＝具平(ともひら)親王のこと。慶滋保胤の弟子であった。
＊横川＝比叡山にある、三塔の一つ。
＊増賀聖＝多武峰(とうのみね)の山中に隠棲していた、高徳の僧。
＊止観の〜聞かず＝経論の冒頭の一節。
＊御堂の入道殿＝藤原道長のこと。
＊御戒＝仏教に帰依した者が守るべき倫理、規則、戒め。
＊御諷誦＝故人の追善供養のため、僧に読経を請う文。諷誦文。
＊請文＝諷誦文の内容に対する受け答えを記した文。
＊寂公＝慶滋保胤のこと。出家して寂心と名乗った。

問一　傍線部①「文作る道、類少なくて」の説明として、最適なものを次の中から選べ。

1　和歌を代筆する才能に優れており、他の者を寄せ付けないということ。
2　手紙を書くことを仕事にしている人は、他にはあまりいないということ。
3　文章を作ることに関しては、他に並ぶ者がいないほど優れているということ。
4　漢詩を作って朗詠する声の質に恵まれた人は、他にはあまりいないということ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部②「参れ」、③「はべれ」、⑧「たてまつり」は、それぞれ誰に対する敬意を表しているか。その組み合わせとして、最適なものを次の中から選べ。

1　②　大内記の聖　③　大内記の聖　⑧　中務宮
2　②　帝　③　大内記の聖　⑧　仏
3　②　大内記の聖　③　あるじ　⑧　仏
4　②　帝　③　大内記の聖　⑧　大内記の聖

問三　傍線部④「思ひやる方もなくて」の解釈として、最適なものを次の中から選べ。

1　落とした場所に心当たりもなくて
2　貸してくれる人も思い当たらなくて
3　落とした言い訳も思い浮かばなくて
4　どうしたら良いのかもわからなくて

問四　傍線部⑤「おのづから罪もよろしくやはべる」とあるが、この時の「女」の気持ちとして最適なものを次の中から選べ。

1　間違いなく罪も帳消しになるに違いないと安堵する気持ち
2　もしかしたら褒（ほ）められるのではないだろうかと期待する気持ち
3　多少なりとも罪が減じられるかもしれないと喜ぶ気持ち
4　自分から罪を受ける方がよいだろうと畏（かしこ）まる気持ち

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部⑥「御倉の小舎人とかが帯を借りてぞ、公事はつとめられはべりける」の解釈として、最適なものを次の中から選べ。

1　御倉の小舎人とかいう者に帯を貸して、その者に政務も滞りなくおさせになったのでした。
2　御倉の小舎人とかいう者が帯を借りて来て、大内記の聖は何事もなく政務をお勤めになったのでした。
3　御倉の小舎人とかいう者の帯を大内記の聖が借りて、何事もなく無事に任務をこなしなさったのでした。
4　御倉の小舎人とかいう者が大内記の聖に代わって、帯を借りて政務は何事もなく執り行いなさったのでした。

問六　傍線部⑦「教へたてまつりて」、⑨「つとめたまひける」、⑬「申しければ」、⑯「読みたまふ」の動作主の組み合わせとして、最適なものを次の中から選べ。

1　⑦　中務宮　⑨　中務宮　⑬　増賀聖　⑯　増賀聖
2　⑦　大内記の聖　⑨　大内記の聖　⑬　大内記の聖　⑯　増賀聖
3　⑦　中務宮　⑨　大内記の聖　⑬　増賀聖　⑯　大内記の聖
4　⑦　大内記の聖　⑨　増賀聖　⑬　大内記の聖　⑯　大内記の聖

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問七　傍線部⑩「かくやはいつしか泣くべき」の解釈として、最適なものを次の中から選べ。

1　出家したのに俗世間に未練があるからといって、このようにいつまでも泣いているべきではない。
2　奥深い法文の教えを聞いて老い先が短いことを悲しみ、こうして今から泣いているべきではない。
3　法文を教えてもらうまでの修行が辛いからといって、これほど早い時期から泣くべきではない。
4　法文の初めの部分を聞いただけで内容がわかるはずもないのに、こんなに早くから泣くべきではない。

問八　傍線部⑪「こぶしを握りて打ちたまひければ、我も人も事にがりて立ちにけり」の説明として、最適なものを次の中から選べ。

1　増賀聖が大内記の聖をこぶしを振り上げて叱りなさったから、見苦しく思った作者も周囲の人々もその場から立ち去ってしまった。
2　大内記の聖が増賀聖と法文の解釈をめぐって口論なさっていたので、あきれ果てた作者も周囲の人達もその場から退出してしまった。
3　増賀聖が大内記の聖をこぶしでたたきなさったので、二人とも気まずく思ってその場を立ち去ってしまった。
4　大内記の聖が増賀聖をこぶしでたたきなさって、互いに大人げない行動を恥じてその場を退出してしまった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問九　傍線部⑫「さてもやははべるべき」の解釈として、最適なものを次の中から選べ。

1　このまま大内記の仕事から遠ざかっているのはよくない
2　このまま法文の教えを受けない状態でいるのはよくない
3　このまま増賀聖のもとで修行を続けているのはよくない
4　このままいつまでも叱られて泣き続けているのはよくない

問十　傍線部⑭「はしたなくさいなみければ」の解釈として、最適なものを次の中から選べ。

1　増賀聖が大内記の聖の悪口を世間に言いふらしたので
2　増賀聖が大内記の聖の才能を高く評価したので
3　増賀聖が大内記の聖の願いを聞き入れなかったので
4　増賀聖が大内記の聖をひどく叱ったので

問十一　傍線部⑮「御気色とりたまひければ」の解釈として、最適なものを次の中から選べ。

1　大内記の聖が増賀聖にご機嫌をなおしてもらいなさって、法文の教えを乞うお願いをなさったところ
2　泣いてしまった大内記の聖をなだめすかすようにして、増賀聖が法文の教えを説こうとなさったところ
3　大内記の聖が増賀聖のようすをうかがって、法文を盗み見ようとなさったところ
4　増賀聖が大内記の聖のご機嫌をうかがって、法文の続きを読んでいただこうとなさったところ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十二　傍線部⑰「まことに深き御法の尊くおぼゆるにこそ」の口語訳として、最適なものを次の中から選べ。

1　まことの奥深い仏法の教えを尊んで覚えようとしているのであろう
2　仏法の深い教えがほんとうに有り難く思い出されるのであろう
3　まことの仏の深い教えをようやく理解したのであろう
4　仏法の深い教えがほんとうに尊く思われるのであろう

問十三　傍線部⑱「受けさせたまひて」の口語訳として、最適なものを次の中から選べ。

1　受けさせなさって
2　お受けなさって
3　受けさせ申し上げて
4　お受け申し上げて

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問十四　問題文の内容と合致しないものを次の中から一つ選べ。

1　心優しい大内記の聖は、人が困っていると黙っていることができず、あとさき考えずに行動してしまうところのある人物だった。

2　漢詩文に優れた才能を発揮した大内記の聖は、普段から仏道にも興味関心を抱いており、どんな時にも心の中で仏を念じていた。

3　信仰心の厚かった大内記の聖は、納得できない教えには、たとえ師の教えであっても最後まで妥協しない芯の強さを持っていた。

4　大内記の聖は時の権力者たちから、その漢詩文に関する能力の高さとともに、信仰心の厚さをも高く評価されていた。

問十五　「四鏡」についての説明として誤っているものを次の中から一つ選べ。

1　『大鏡』は、仮名書きによる最初の歴史物語で、道長を賛美する内容が紀伝体で書かれ、「四鏡」の中でも最高傑作の位置をしめている。

2　『今鏡』は、整然とした紀伝体で書かれているが、内容が平板単調になってしまい、『大鏡』に比べると文学的評価は劣るとされている。

3　『水鏡』は、それまでと異なる編年体を用いて書かれ、『大鏡』に扱われる以前の神武天皇から仁明天皇までの時代について描かれている。

4　『増鏡』は、『水鏡』と同じ編年体を採用し、豊富な資料を基に公家側に立って風雅な宮廷社会を流麗な擬古文で描いている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【補足】（講義動画中に使用します）

「　　　　　　　　」の意味

失す
隠る
身まかる
はかなくなる
むなしくなる
いたづらになる
あさましくなる
言ふかひなくなる
いかにもなる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　復習問題

①「いつしかと待ちいでたるちご」の傍線部の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　早く大きくなれと
イ　大きくなるのが早すぎると
ウ　いつの間にか大きくなったと
エ　気がつかないうちに生まれていたと

②「念じてこそあらめ」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　辛抱いたしましょう
イ　覚えておきましょう
ウ　謝罪いたしましょう

③「行ひつとめ」は、どのような意味か。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　加持・祈禱の勉強をする。
イ　仏道の修行に励む。
ウ　世の中の混乱を正す。
エ　母親の面倒を見る。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④ 次の傍線部の口語訳として、最も適切なものを後の中から選べ。

後拾遺を撰(えら)ばれける時、秦兼久(はたのかねひさ)、行き向かひて、おのづから歌などや入ると思ひて、うかがひけるに、…

ア　みずから　　イ　まれに　　ウ　ひょっとしたら
エ　当然　　オ　ひとりでに

⑤ 「舎人」の読みとして最も適当なものを次の中から選べ。

ア　くろうど　　イ　おとど　　ウ　とねり　　エ　しゃじん　　オ　まろうと

⑥ 『増鏡』はどのジャンルに入るか、次の中から選べ。

ア　歌物語　　イ　随筆　　ウ　歴史物語　　エ　説話　　オ　軍記物語

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　模範解答

問一　3　**問二**　2　**問三**　4　**問四**　3　**問五**　3　**問六**　2　**問七**　4　**問八**　3

問九　2　**問十**　4　**問十一**　1　**問十二**　4　**問十三**　2　**問十四**　3　**問十五**　1

〈現代語訳〉

大内記の聖〔＝慶滋保胤〕は、立派な博士であって、文章を作ることに関しては、他に並ぶ者がいないほど優れていて、朝廷につかえていたが、心はひたすら仏道に深く寄せて、慈悲の心がとりわけ深かったので、大内記として、記録しなければならないことがあって、呼び出されて宮中に参上したところ、左衛門の陣などの方であろうか、女で泣いて立っている女がいたので、「どういう訳があって、このように泣くのか」と尋ねると、「主人の使いで、石帯を人に借りて、持って帰りましたが、道に落としてしまいましたので、主人にもひどく、叱られるだろう。これほどの物を失くしてしまったことが、情けなく悲しくて、帰る気にもなれないので、どうしたら良いのかもわからなくて、それで泣いているのです」と申し上げたので、「心の中を推察すると、本当にさぞかし悲しいだろう」と言って、自分がつけていた帯を解いて、（女に）与えたところ、「元の帯ではないけれど、（借りた）かいもなく失って弁解する言葉がないよりも、もしかすると罪も減じられるかもしれません」と言って、「これを持って帰る嬉しさ」と、手を合わせて、（帯を受け）取って帰った。そこで、（保胤は）片隅に帯もなく隠れて座っているうちに、行事が始まったので、「遅い、遅い」と催促されて、御倉の小舎人とかいう者の帯を（保胤が）借りて、（何事もなく無事に）任務をこなしなさった。

『池亭記』といって（保胤が）書かれた文章にも、「身は俗世にあって、心は隠遁にある」とあるそうです。中務宮〔＝具平親王〕が、（保胤に）学問を習いなさった時も、（保胤は）学問を少しだけお教え申し上げては、目を閉じて仏を念じ申し上げて、怠ることなく仏道にお励みになった。

このようにして年月を過ごしているうちに、年取ってから、出家して、横川に登って、法文を習いなさったが、増賀聖がまだ横川に住みなさっていた時で、「止観の明静なること、前代にいまだ聞かず」と読みなさると、この入道〔＝保胤〕がただひた

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

すら泣くばかりなので、聖は、「こんなに早くから泣くべきではない」とおっしゃって、こぶしを握ってお打ちになったので、二人とも気まずく思ってその場を立ち去ってしまった。またしばらくしてから、「このまま法文の教えを受けない状態でいるのはよくない。例の文をご伝授いただきましょう」と（保胤が）申し上げたので、（聖が読むと保胤は）また前のように泣いたので、また（聖が保胤を）ひどく叱ったところ、続きの言葉も聞くことができないで過ごすうちに、また懲りもせず、保胤が聖にご機嫌を直してもらいなさって、法文の教えを乞うお願いをなさったところ、また（聖が）改めてお読みになると、同じように（保胤は）ますます泣いて座っているので、聖も涙をこぼして、「本当に仏法の深い教えが尊く思われるのであろう」とおっしゃって、感心して、その文を静かに伝授なさった。

そうしてはなはだ尊くございましたので、御堂の入道殿〔＝道長〕も、御戒などをお受けなさって、聖〔＝保胤〕が亡くなった時には、御諷誦などしなさって、さらし布百匹を下さった。請文には、三河の聖が献上なさって、秀句などを書き留めなさったそうである。

昔隋の煬帝が（千人の僧に食事を供した時）智者の化身が受けて、一人分足りなくなったが、今左丞相の寂公〔＝保胤〕の
追善供養に下さった、さらし布は百千に及んだ

と書きなさりました。

〔重要単語〕

○やむごとなし…①捨ててはおけない。　②**並々ではない**。　③高貴である。
○うち【内】…①内部。　②家の中。　③心の中。　④**宮中**。　⑤**天皇**。
○おのづから【自ら】…①**自然と**。　②**たまたま**。　③**ひょっとして**。
○ねんず【念ず】…①**祈る**。　②**我慢する**。
○つとむ【勤む・勉む・務む】…①勤務する。　②**仏道修行をする**。
○みまかる【身罷る】…**死ぬ**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十二講　解答解説

〔解説〕

① 「**いつしか**～願望」は「**早く**～願望」と訳す。本設問では願望の部分が省略されているが、直後の「待ちいでたる」から何かを「待っている＝望んでいる」のはわかる。よって、正解はア。

② 「念ず」は重要単語で、「我慢する・祈る」の意味。よって、正解はア。

③ 「行ひ」は重要単語で、「仏道修行」の意味。「つとめ」も「仏道修行をすること」。よって、正解はイ。

④ 「おのづから」は重要単語で、「自然と（ひとりでに）・たまたま（まれに）・ひょっとして」の意味。よって、アとエは削る。前後をきちんと読むと、後拾遺和歌集に載せる歌を選ぶ時の話で、「おのづから」歌が入るかと思ってうかがった、と続いていくので、「ひょっとして」が最適。よって、正解はウ。

⑤ 読みの問題。「舎人」は「とねり」と読む。よって、正解はウ。

⑥ 『増鏡』のジャンルは「歴史物語」。よって、正解はウ。

〔解答〕

① ア　② ア　③ イ　④ ウ　⑤ ウ　⑥ ウ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。